

6年 「戦争と人々の暮らし」にプラスワン

(教科書では『小学社会 6上』 p. 118～132)

昭和 20 年(1945 年)に太平洋戦争が終わってから、70 年以上が過ぎた。日本はアジア諸国に甚大な被害を与え、それと同時に多くの犠牲を払った。かつては、この小単元の学習をする際に、戦争体験者の話を聞く活動を行うことが定番だったが、今ではそれも難しくなっている。

日本の歴史を初めて学習する小学校段階の授業では、この戦争によって日本が他国に与えた被害と日本が他国から受けた被害の両方をバランスよく触れることが大切だ。このバランスを崩してしまうと、戦争の実相にせまることが難しくなってしまう。

そこで、「この小単元では事実認識を中心に学習した方がよい」という声も聞くことがある。しかし、戦争の悲惨さを実感することなしに、児童が「深い学び」に到達できるとは考えられない。戦争の経緯や被害の実態を淡々と学習するのではなく、実感を伴った理解にまで高めていけるよう、指導を工夫していきたい。

1 「あなたならどうする」と当時の人々の立場に立って考えさせ、児童の問題意識を高める

導入では、空襲や原爆によって焼け野原になったまちの姿を提示して、戦争の悲惨さを児童に感じさせることが多い。児童は、戦時中のまちの写真と戦争の前(あるいは戦争の後)の写真を比較することで、戦争というものが持つ巨大な破壊力に対して強い問題意識や追究意欲をもつ。その際に、児童が最も関心をもつのは、「こんなにひどい戦争を、なぜしてしまったのか」という、「戦争の原因」である。

「調べる」段階では、まず「日本は、どうして戦争を始めたのだろうか」という課題をもうけ、満州進出から日中戦争に至る経緯を学習する。

教科書には、昭和の初めに世界恐慌の余波を受けて、失業者や生活に苦しむ人々が増えたために、満州に進出したことが書かれているが、この言葉だけでは、人々の苦しさや切実感は伝わりにくい。

当時の農村は、農業と養蚕業が生活の柱だった。しかし、世界恐慌によって、生糸の対米輸出が激減し、生糸の価格が暴落した。さらに、その余波を受けて、農産物の価格も下落した。昭和 6 年(1931 年)、9 年(1934 年)は、大凶作に見舞われ、さらに収入が少なくなっていた。当時の農家の多くは小作農だったが、小作料が払えなくなり離村する者や、娘を身売り(身売りされると、お金と引き換えに約束の一定期間、勤め先へ働きに出て、身の自由を制限される)に出す者も現れた。(写真提供;アフロ)

授業の初めには、大根を生のままかじっている子どもの写真(右の写真)を提示して、感じたことを発表させていく。この写真は、東北地方が冷害による凶作に見舞われた頃の写真だといわれている。



T) この写真を見て、感じたことや考えたことを発表しましょう。

C) どうして大根をかじっているのだろう。

- C) ほかに食べるものがないのではないかな。
- C) 大人が見当たらない。親はいないのかな。
- C) 顔が汚れているから、お風呂にもあまり入っていないと思う。
- C) 着ているものも古そうだ。
- C) はっきり見えないけれど、後ろの家も古びているみたいだ。

当時の人々の気持ちを想像させることも有効だ。

- T) この子たちは、どんなことをつづやいているのでしょうか。
- C) おなかいっぱいお米を食べたいなあ。
- C) 豊かな生活がしたいなあ。

大根だけでなく、汚れた顔や着物、古びた家屋にも注目させると、貧しさやひもじさを、より一層感じ取ることができる。さらに、仕事を探す子どもや娘の身売りの相談所など、昭和初期の農村の写真を提示して、解説を加えていく。子どもが働くことは現代の日本では考えられない。ましてや、子どもが売られるなどということは、児童にとっては、遠い外国の話としか思えないだろう。子どもは強い驚きを感じながら、不景気や凶作による生活の苦しさを実感していく。当時は、自分の土地を持たない小作農が多かったことも伝え、次のように発問する。

- T) 生活の苦しさを解決するために、あなたならどうしますか。

「自分ならどうするか」を考えさせることで、この学習が一気に自分事になっていく。

- C) 食べ物を節約して耐える。
- C) 他の場所へ引っ越す。
- T) 引っ越すと言っても、農業ができるような土地はもう誰かのものだし、土地を買う金はありませんよ。
- C) 他の仕事をする。
- T) 不景気で都会にも仕事がなくなり、農村に帰ってきた人も多くいました。
- C) うーん、それなら外国に行く。

児童の目が海外に向いたところで、教科書に出ている「満州へ移住した人々」の写真や満州の地図を見せ、日本がアジア大陸に進出して広大な土地を手に入れたことに気付かせていく。

- T) 中国や世界の人たちは、日本が満州を支配したことをどのように感じていたと思いますか。
- C) 出て行ってほしい。
- C) 土地を使うなら、お金を払ってほしい。

日本の行動に対して、中国の不満が高まってきたことや、国際的な孤立につながっていったことを予想させていく。

授業前半で、日本の置かれた状況を把握し、当時の人々の立場に立って考えることで、実感を伴った

追究活動を進めていくことができる。

2 戦時中の人々の生活を調べる活動に、当時の子どもの平均身長をプラスワンして、多角的な見方を深めていく

戦争中は、食料や物資が不足し、国民の生活を圧迫していった。その影響は育ち盛り子どもたちを直撃した。明治以来、子どもの平均身長は常に伸びてきたが、敗戦後は全年代の身長がマイナスになった。特に14歳の男子は6cmも縮んでしまった。この数字を提示することで、戦争中の国民の生活を予想させ、追究意欲を高めていく。

(文部科学省「体力・運動能力調査」)

	1939 (昭和 14) 年度	1948 (昭和 23) 年度	2015 (平成 27) 年度
男子	152.4cm	146.0cm	165.1cm
女子	148.7cm	145.6cm	156.5cm

授業の初めに、2015年度の14歳(中学3年)の平均身長を示す。次に、1939年の平均身長を見せる。子どもたちは現代との違いに驚くに違いない。

そして、1948年度の身長を予想させる。多くの児童は、1939年度と2015年度の間を予想する。数人の児童は、1939年よりも低い身長を予想するが、ここではその理由は聞かないで置く。1948年の身長を知らせる時には、十の位を最後に知らせると子どもの集中力を高めることができ、問題意識を高めやすい。

T) 明治時代以来、日本人の身長は少しずつ伸びてきましたが、1948年度の調査では日本人全体が小柄になっていました。減ったのは身長だけではありません。体重も、14歳男子は1939年度の43.6kgから1948年度は38.9kgへと、4.7kgも減りました。どうしてだと思いますか。

C) 食べ物が少なかったからではないか。

T) 身長の伸びが止まるほどの生活とは、どのようなものだったと思いますか。

C) 働く人が戦争に行ってしまうと、食べ物が作られなかった。

C) 家が焼けて、料理ができなくなった。

現代の子どもたちに必要なエネルギー量は、12～14歳男子で2,500kcal、女子で2,250kcalだが、集団疎開した児童が戦争末期に摂取していたエネルギーは、1日1,300～1,400kcal程度だったと言われている。導入を工夫することで、児童は当時の子どもの立場に立って、意欲的に調べたり考えたりするようになる。

なお、指導に際しては、クラスの児童の身長、体重が様々であることに留意しておきたい。身長、体重の違いは、食料事情のみによるものではない。そのことに、状況に応じて触れる必要がある場合もあるろう。

(2017年9月)

《参考資料》毎日新聞「数字は証言する～データで見る太平洋戦争」

あらし げんしゅう
嵐 元秀

東京都の公立小学校教師。教師歴29年。楽しみながら、調べ・考え・表現する力が高まっていく社会科授業を旨として研究・実践をしている。